

「玉鬘」巻と「初音」巻についての一考察

金賢貞*

(e-mail : sirayuki@paran.com)

目次

1. 序
 2. 「玉鬘」巻での衣配りと和歌論
 3. 「初音」巻の正月の様相
 4. 結
-

1. 序

「玉鬘」巻と「初音」巻は後に続く巻といっしょに『源氏物語』の中でも源氏とその一族の華やかな生活を最もよく見せてくれている。不安で心細かった須磨での生活から帰京した源氏に、もはや試練は何も残ってない。政治的にもいいことが重なり、養女にした六条御息所の娘齋宮の女御が中宮となり、源氏自身は太政大臣になっていた。源氏は前から考えていた四季をテーマにした六条院という盛大な邸宅を作って、数多い女君をそこに住ませ、彼女たちと豊かで華やかな生活を送ることができたのである。

「玉鬘」巻の末から「初音」巻にかけては、六条院と二条院に住んでいる源氏の女君たちに関連する話が詳しく述べられている。この二つの巻には、女君の特徴と性格、人柄をとってもよく見せてくれる記述が多い。女君たちは源氏の庇護下豊かな生活を送っており、特に正月を迎えて華やかさの極致を見せる六条院でみんなが羨むような暮しをしている。そして、「初音」巻では源氏が新しく造成した六条院ではじめて迎える正月の話が述べられている。

* 한국전통문화학교 부교수, 일본 고전문학 및 고대 민속학

一見「初音」巻はそのような源氏一族の栄華と華やかさの絶頂を見せてくれる明るい内容の巻のように見えるが、実際その華やかさの裏側にある暗い面もいっしょに照らし出していることはよく指摘されていることである。頂点に達した源氏の栄華も紫の上の発病など時間が経つにつれて暗い影を深めていくが、華麗な栄華だけが述べられているように見えるこの巻からもすでに栄華の裏側の様々な様子がともに書かれているのである。

本稿では、作者の意図によって緻密に構成されている、そのような「玉鬘」巻と「初音」巻の二重的な構造について詳しく考察してみたいと思う。さらに、この二つの巻には六条院と二条院に住んでいる源氏の女君たちに関連する話が詳しく述べられているが、源氏の女君たちが正月前後の行事などを通じて全部言及および登場しているし、彼女たちの六条院での地位や彼女たちの評価、外見、人柄などあらゆる面について非常に詳しく述べられている巻なので、女君の研究には欠かせない巻とも言える。

そして、そのような女君たちについて述べることにしても、作者の小説的テクニックとも言える技巧と緻密な構構がより物語を物語らしく、興味津々なものにするのに大きく役立っているのである。それについてもいっしょに考察していきたいと思う。

今までの研究を見てみると、実際「玉鬘」巻とか「初音」巻だけについてはさほど研究が多く行われているわけではないが、特に六条院とそこに登場する女君の話を中心に様々な研究がされている。

片根満保氏は「初音」巻と「胡蝶」巻に見られる明石の君、紫の上、玉鬘などの女君たちに焦点を当ててその人物論について鋭く述べておられるし、¹⁾安随直子氏は「初音」巻を中心に華やかに見える六条院の内と外について論じておられる。²⁾さらに、田中幹子氏は「初音」巻の明石の君に関わる歌の解釈を中心に、和歌の方面からこの巻を研究されている。³⁾また、増田繁夫氏は「玉鬘」巻と「初音」巻などを中心に有名な春秋の争いについて論じておられる。⁴⁾春秋の争いとは秋好む中宮と紫の上の、春がいいのか秋がいいのかをめぐる歌の応酬のことを言う。「少女」巻から始まった春秋の争いは「胡蝶」巻まで続いており、それをめぐる人物論など様々な方面からの研究がされている。

さらに、本稿のテーマにも深い関わりのある六条院の明暗に照明をあてている研究もいくつかあり、池浩三氏は華やかに見える六条院に隠されている明暗について構想論的な観点から論じておられるし、⁵⁾土方洋一氏はテキスト論の観点から六条院の明るい部分と暗い部分について述べられている。⁶⁾さらに、原田敦子氏は『源氏物語』と『紫式部日記』

1) 片根満保(1999) 「六条院の女君達—初音巻・胡蝶巻を中心に」 (『国語と国文学』) 至文堂 p.35

2) 安随直子(1991) 「初音巻の基底—六条院の内と外」 (『国語国文』) 中央図書出版社 p.11

3) 田中幹子(1995) 「『源氏物語』初音の巻の明石の君について—「谷のふる巢をとへる鶯」歌の解釈を中心に」 (『和歌文学研究』) 和歌文学会 p.19

4) 増田繁夫(1987) 「春秋の争い—玉鬘・初音・胡蝶」 (『国文学 解釈と教材の研究』源氏物語の巻々—作品論の現在<特集>) 学灯社 p.77

5) 池浩三(1991) 「光源氏の六条院—そのかくされた構想」 (『中古文学』) 中古文学会 p.39

との影響関係を中心に六条院に影の部分を見せている作者の意図について詳しく論じておられる。7)

これらの研究をふまえて、本稿では特に六条院に住んでいる女君たちをめぐる華やかな生活とその裏側に見られる影の部分をいっしょに照らして、「玉鬘」巻と「初音」巻にかけて緻密に構想されている物語の意味と作者の意図をさぐってみたいと思う。特にこの二つの巻で明るい部分とその後必ず暗い部分をいっしょに照らし合わせて、より両方を際立たせる構造に注目し、さらにはこの二つの巻の独特な構造とそこに潜んでいる作者の意図とそれをあらわすために使っている小説的技巧の話もいっしょにしたいと思う。

2。「玉鬘」巻での衣配りと和歌論

「玉鬘」巻には源氏35歳の時の話が述べられている。源氏は須磨でのつらい生活から戻って、政治的にも最高の位置を確保し、四季をテーマにした豪華を極める六条院を造営したのである。六条院は四季の町から成っており、紫の上は春の御殿、花散里は夏の御殿、秋好中宮は母御息所の旧邸跡に新しく造った秋の風物をあらわす御殿がそのままあてられた。冬の御殿には明石の君が住むことになった。さらに、二条の東院には末摘花と尼生活を送っている空蟬が暮していた。

このように女君たちを自分の庇護下において、何一つ不足のない生活を送っていた源氏は、そんな中でも昔急死した夕顔のことを忘れることができないでいた。「玉鬘」巻は夕顔の娘である玉鬘との劇的な出会いの話が中心となっているが、彼女との出会いを喜んで源氏は玉鬘を養女として六条院の夏の町の西の対に迎え取り、花散里にその後見を頼んだのである。田舎育ちではあるが、きれいで教養も高かった玉鬘は貴公子たちの注目の的となり、彼らの心を惑わせることになる。突然のドラマチックな登場ではあるが、玉鬘は他のどの女君よりも目立ち、物語の中心的な位置を占める。

これで、六条院の各四季の町の女主人ともなる女君は、春の御殿の紫の上、夏の御殿の花散里、玉鬘、秋の御殿の秋好中宮、冬の御殿の明石の君と5人になった。二条の東院で静かに住んでいる末摘花と空蟬を含めたら、源氏は全部で七人の女君を自分の庇護下において暮しているということになる。

「玉鬘」巻の末尾は六条院ではじめて迎える正月の準備として、このような女君たちに正月用の晴着を配る場面がある。これが「衣配り」と呼ばれる有名な場面であるが、源氏は女君たちのそれぞれの年齢や容貌、性格にふさわしい衣装を特別に見立てて配るように

6) 土方洋一(1983)「六条院の光と影—テキスト論の視座から」(『国語と国文学』)至文堂 p.30

7) 原田敦子(1998)「栄華 その光と陰：源氏物語初音・胡蝶巻と紫式部日記」(『国文学攷 118』) 広島大学国語国文学会 p.15

する。そして、それに対する返事もまたそれぞれであるが、この衣配りの話をよく見ると、源氏の女君への評価や女君たちの性格などが大変よく現われている。

さらに、『源氏物語評釈』で玉上琢弥氏の指摘によれば、衣配りで記された順序は六条院での位置の重さを表しているものである。

その順位は、紫の上、明石の姫君、花散里、西の対の姫君、末摘花、明石の御方、空蟬の尼となる。西の対の姫君の扱いが重いのは、前に言ったように、今日の催しが、この人のために始まったからである。明石の御方の低いのは、紫の上の嫉妬がうるさいからである。それぞれの特殊事情があって源氏はこのようにしたのだが、いったん源氏がこじれたとすれば、これが六条の院の序列となる。今の世の読者は驚くであろう。明石の御方のあまりの低さに。花散里のあまりの高さに。結局は生まれなのである。大臣の娘と国守の娘の差であるのだ。それと同時に、親王の姫でも、衰えれば末摘花となり、栄えれば紫の上となる。本人の美醜、才能、努力も無意味ではない。⁸⁾

六条院の中の女君たちはこのように目に見えない順位によって、その扱いも違っていただのである。このような女君の順位と位置は、様々な面で違う形と待遇であらわれているのは確かなことであり、それが衣配りにも影響を及ぼしているのである。

源氏は紫の上とともに衣装を整えていたが、女君たちのそれぞれの年齢や容貌、性格にふさわしい衣装を見立てて配るようにしたのは、紫の上が「着たまはん人の御容貌に思ひよそへつつ奉れたまへかし。着たる物のさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」⁹⁾と話したからである。実際昔も今も服装は着る人の性格や年齢がよくあらわれるものであることには間違いがない。

平安時代の貴族たちは、洗練された美意識と調和を大変重要視していたので、衣装の色などは四季、自分の住まいや調度品なども調和を求めている。そのような平安貴族たちの美的感覚が最もよくあらわれるのも衣装であったと言えよう。それゆえ、衣装の色合いとそれを上手に組み合わせた色彩感覚は、それを選んで着る人の美的感覚をよく見せてくれるものでもあり、自分の個性を最もよく表現できる手段でもあったのである。それで、衣装を見てそれを着る人の人柄、外見、年齢などを判断するのは決して無理なことではない。

源氏はそれを聞いて「つれなくて、人の御容貌推しはからむの御心なめりな。」¹⁰⁾とそれとなく、他の女君たちの器量を推し量ろうとする紫の上の本心を見抜く。実際紫の上は他の女君を実際見るができないので、衣配りで他の女君の器量と源氏の彼女たちへの心をさぐろうとしたと見える。

8) 玉上琢弥(1965)『源氏物語評釈 第五巻』角川書店 p.145

9) 1997 新編日本古典文学全集『源氏物語 3』(「玉鬘」) 小学館 p.135

10) 注9と同じ。p.135

テキストの注にも示めされていることであるが、服装はそれを着る人と離れられない関係だという考えは、この物語に一貫する。源氏が自ら選んだそれぞれの衣装によって相手の女の品定めをしようと真剣な目つきの紫の上、源氏はそれを鋭く察知する。豪華な衣装と相まって優雅でありながら厳しい女の闘いが展開する。源氏はその演出者の位置を占めているのである。11)

それで、結局源氏自ら女君たちの容姿や人柄ににあう衣裳を見立てることになった。その本文を見てみると、

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小袿、今様色のいとすぐれたるとはかの御料、桜の細長に、艶やかなる搔練とり添へては姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなめきたれどにほひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対に奉れたまふを、(「玉鬘」p.134)¹²⁾

このように、紫の上には紅梅の模様が大変よく浮いている葡萄色の小袿と、今様色すなわち紅花をたくさん使った濃い紅染を贈る。花散里には、蓼藍の生葉で染めた海賦の織物の上着と濃い紅の搔練の下襲を、玉鬘には真っ赤な表着に山吹の花模様のある細長を贈る。

これらの記述は、色鮮やかな王朝衣装を通じてそれを読む人の想像力をかきたて、読む側がそれを着る女君のイメージを具体的なものにするという、非常に巧妙な手法を使っている。さらに、紫の上が女君それぞれに贈る衣装を見ながら、嫉妬したり心穏やかではなかったりする様子を細かく描写することによって、この物語を読む読者の目を様々な角度で代弁するように描いていくのも、驚くべき小説展開法であると言えよう。

このような記述方法は、さらに続く。

かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなめきたれば、人知れずほほ笑まれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小袿に濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梶子の御衣、聴色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ、げに似ついたる見むの御心なりけり。(「玉鬘」p.136)

末摘花は醜い容貌で有名な女君であるが、そのような末摘花にも源氏は「いで、この容貌のよそへは、人腹立ちぬべきことなり。よきととも物の色は限りあり、人の容貌は、後れ

11) 注9と同じ。pp.136-7

12) 以下『源氏物語』の本文のテキストは小学館の新編日本古典文学全集本を用いた。

たるも、また、なほ底ひあるものを」¹³⁾と言う。物の色合いには限りがあるが、いくら劣っているとしても人の器量には奥の奥があるという、非常に興味深い源氏の哲学がうかがえる。実際服装はそれを着る人と不可離なという考え方が『源氏物語』に一貫するというのは前述したとおりである。しかし、ここで源氏は女をその容貌だけでは判断してはいけないう、人の器量には奥があるので服装などもそれにあわせて、器量の劣る末摘花にも奥深いきれいな衣装を贈るのである。

末摘花に贈ったのは柳の織物の唐草の乱れ模様の織り出したものであり、その優艶な感じと末摘花が着ているのを想像して、その不似合な感じに源氏はつい苦笑してしまう。このような源氏の行動を見ると、口で話した内容と実際の現実とは違うことがわかる。いくら話では「人の容貌は、後れたるも、また、なほ底ひあるものを」と言っても、実際現実的に醜い容貌にきれいな衣装は似合わないものである。ここでも、妖艶な衣装が似合わないという事実を通じて、末摘花の容貌について読者が様々に想像して判断できるような記述をしているのである。

さらに、

梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小袿にき小袿に濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。(「玉鬘」 p.136)

このように明石の上には舶来風の白い小袿に濃い紫色の艶あるのを贈る。紫と白という色あわせが非常に気品のある色の組合わせで、小袿とは高貴な女性が平常に着た代表的装束のことを言う。それを見た紫の上はそれが似合う彼女の高貴で優雅な人柄をつい想像してしまい、心穏やかではなくなる。

このように、紫の上は実際見たこともない女君たちに対して、彼女に似合う衣装や源氏の言葉などで想像し、嫉妬し、苛立つ。普段穏やかな紫の上の複雑な心理描写が非常によく描かれており、読む側の人もその気持に吸い込まれるようになる。

もう一人、空蟬は静かに二条院で尼生活を送っていたが、彼女も源氏の庇護下で暮らしていた。

空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梶子の御衣、聴色なる添へたまひて、(「玉鬘」 p.136)

彼女には青鈍色の趣味のいい織物や梶子色と聴色、すなわち赤味の黄色の衣装を贈る。赤でもなく、完全に黄色でもない、奥のある色で、空蟬の慎みのある尼生活を代弁す

13) 「玉鬘」 p.136

のような衣装と言える。源氏が自分用の衣装からわざわざ服を選んで空蟬にあげたことなどで、源氏の彼女への愛情を確認することができる。

これらの記述を通じて、源氏の優れた色彩感覚や、彼女への源氏の愛情度などがよくかがえるのである。

このような源氏の贈り物に対して、みな心を込めて挨拶の手紙を送る。その中で、特別にその返事の内容に対して長々と言及しているのは、以外と他の女君でもない、末摘花の手紙である。

うはしくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の桂の袖口いたくすすけたるを、うつほにてうちかけたまへり。御文には、いとかうばしき陸奥国紙のすこし年経、厚きが黄ばみたるに、「いでや、賜へるは、なかなかこそ。

きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして」

御手の筋、ことに奥よりにたり。(「玉鬘」p.137)

末摘花の古風で几帳面な一面が本当によくあらわれている記述だと思われる。末摘花の返事についての話はこの後も続くが、私はなぜ他の女君の手紙の紹介がないのに、この末摘花の手紙だけが細かくとりあげられているのかについて疑問を持たざるを得なかった。その手紙の内容が特にすばらしいわけでもなく、「いといたくほほ笑みたまひて、とみにもうち置きたまはねば」と源氏も苦笑せずにはいられなくなるような返事である。

「玉鬘」巻の最後の記述にこの末摘花の手紙の内容と、その手紙や末摘花に対する源氏の考えを長々と述べているのは、確か作者の意図あつてのことであろう。私はその意図というのが、前述した衣配りの延長線上にあると思う。私は衣配りとそれに対する源氏の話などの記述を通して、その女君の性格と外見、またその女君が物語で示している位置などを読者が想像して判断できるようしていると思った。

つまり、女君について直接言葉で述べる方法を使わず、その女君を直接見たことのない紫の上が源氏の選ぶ衣装の色や絵柄などで女君たちの性格や人柄などを投影して想像し、判断したのと同じように読者も女君たちについての想像と判断を衣配りと手紙の返事を通してするようにまかせているのである。それは直接記述で表現するより、もっと様々な形の想像をかきたてる効果があり、優雅な衣装に投影された女君は大変奥深く感じられる。

『源氏物語』が書かれた平安時代は、男も女も顔を直接見たりすることよりも、その人の噂や手紙の筆跡、その人に似合う衣装などでその人の人柄や外見までも判断することが一般的であった。それが当時の文化であり、社会的習慣だったのである。それが物語の中で同じような形で繰り広げられることにより、現代の人が読む時は非常に奥深く、優雅な記述方法に思われるのである。

しかし、末摘花の古風な返事についての話だけが長々と続いているのはそれだけでは説

明できないものがある。もし作者の紫式部がそのような効果を狙ったとしたら、衣配りの時と同じように、返事についても他の女君を全部一人一人述べなければならないのである。特にすばらしく美しいわけでもない末摘花の返事だけをとりあげて「玉鬘」巻の最後を飾っているのは、他の理由もあってからであろう。

私はそれが源氏の和歌論を述べるための一つの道具であったのではないかと思う。あまりにも内容が古風で、筆跡までも格段と古風な末摘花の返事は、源氏を苦笑させる。紫の上がどうしたことかと思うほど、源氏はその手紙を下におけずにとり見えてしまっているのである。そして、源氏の鋭く冷たい和歌論が述べられる。

古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るかごとこそ離れねな。まろもその列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、いまめきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ妬きことははたあれ。人の中なることを、をりふし、御前などのわざとある歌詠みの中には、円居離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のをかしきいどみには、あだ人といふ五文字をやすめ所にうち置きて、言の葉のつづき、たよりある心地すべかめり」など笑ひたまふ。（「玉鬘」p.138）

末摘花は昔風の歌の読み方だけにこだわって、今風の歌の読み方にはまったく興味さえないというのである。ここからも末摘花の性格の一面が非常によくうかがえる。今風だとか流行とかには興味さえなく、自分の持っているものと生きてきた生活スタイルは依然と守り続ける人である。他の女君とはかなり違う末摘花のおもしろい性格が、彼女の手紙にそのままあらわれており、彼女の外見までも想像させてしまう。独特ではあるが、物語のキャラクターとしては最高におもしろい人と言えよう。さらに、源氏の和歌論は続く。

よろづの草子歌枕、よく案内知り見つけて、その中の言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うは変らざるべけれ。常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか、和歌の髓脳いとところせう、病避るべきところ多かりしかば、もとより後れたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」とて、をかしく思いたるさまぞいとほしきや。（「玉鬘」p.138）

源氏の態度はあくまでも皮肉的である。これを見ると、実のところ末摘花は和歌の勉強にも熱心で様々な草子や歌枕などもよく読みこなしているのである。さらに、和歌の秘訣がきつしりと書いてある常陸の親王が書き写したという草子を源氏に読んでみるように貸してくれたことさえある。源氏はそれを返してしまいが、末摘花はそのような本を読んで歌の勉強もよくできているはずなのに、この歌のありふれた感じは何という反応である。

長谷川政春が指摘されているごとく、「唐衣」の語が多用されているということだけでな

く、「蓬生」の巻を除けば、末摘花は自ら詠んだすべての歌に「唐衣」の語を詠み込み、そればかりを一つ覚えのように詠んでいたのである。14)

このような話の中で、末摘花の古風な一面はより大きく浮き上がり、源氏の和歌論についても読む側がよくわかるようになる。「玉鬘」巻の最後に末摘花の手紙の話だけが長々と述べられているのは、このような様々な効果を狙ったことと思われる。

3。「初音」巻の正月の様相

「玉鬘」巻に続く「初音」巻には、六条院ではじめてむかえる正月の様相がよく描かれている。その華やかさとすばらしさは言葉で言い尽くせないほどであり、特に紫の上の春の御殿はこの世の極楽と言えるほど美しかったのである。「初音」巻では、このように華やかな六条院で行われる新春行事や人々の様子、希望と楽しみに満ちた正月の風景が広げられている。

巻の最初の記述から

年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうらけきには、数ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。(「初音」p.143)

とあり、これからの話の明るい雰囲気は予想できるようにしている。「初音」巻は全体的に他の巻に比べても非常に明るくて楽しく、めでたい雰囲気で満ちている巻と言える。

しかし、すでに池浩三氏や15)土方洋一氏16)などの学者たちによって多く指摘されているごとく、作者はこのように華やかな話の中でも、常にその裏側にある苦悩と悲しみ、暗い一面をいっしょに述べるのを忘れてはいない。明るければ明るいほど、影はより暗く見えるものである。もはや悩みごとは何もなく、天下を取っている源氏にも、またその庇護下で何の悩みもなしに暮しているように見える一族も、それぞれ抱えている暗い痛みはあり、それは人間の常と言える。そのような一面を紫式部はしっかり見つけ、物語の中でも充実に描いている。

しかし、全体的な雰囲気があまりにもめでたく明るいため、ひそかにふれている暗いところを探し出すのは容易なことではない。これから「初音」巻の華やかな正月の様相とその裏側に見られる世界をもいっしょに考察してみたい。

14) 長谷川政春(1991)「末摘花―「唐衣」の女君―」(『源氏物語講座2 物語を織りなす人々』) 勉誠社 p.113

15) 池浩三(1991)「光源氏の六条院―そのかくされた構想」(『中古文学』) 中古文学会 p.39

16) 土方洋一(1983)「六条院の光と影―テキスト論の視座から」(『国語と国文学』) 至文堂 p.30

六条院の中でも紫の上の春の御殿は「生ける仏の御国とおぼゆ」まで表現されており、他の御殿とも差を見せる。六条院は建築構造とそれぞれの町をそこに似合う女君に住ませることによって、女君たちの人柄と性格が判断できるようにしているのである。紫の上に特別きれいな春の御殿を当てているのは、彼女が数多い女君の中でも一番であることへの暗示であろう。彼女は源氏からも最も寵愛されており、すべての面において優れている存在として書かれている。

正月の段においても、「何ごとにつけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえかはしたまふ。」とあり、元日から末長い契りの歌の贈答をしているのである。これらのことから、源氏が最も信頼し、最も寵愛する女君であることが再確認できる。紫の上はまさに六条院の実質的な女主人と言えるので、それにふさわしい住まいを彼女に当てているのであろう。

源氏は紫の上との歌の贈答の後、他の女君の所に新年の挨拶をしにまわる。その最初が明石の姫君である。今までのめでたい話とは違って、明石の姫君のもとでは元日早々涙を見るようになる。明石の姫君は同じ六条院に実母の明石の君と住んでいるが、明石の君が身分が低い生活をしつづけておらずに紫の上に養育されていた。その母からの手紙に明石の姫君は涙を見せるのである。

えならぬ五葉の枝にうつる鶯も思ふ心あらんかし。

「年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音きかせよ
音せぬ里の」と聞こえたまへるを、げにあはれと思し知る。事忌もえしたまはぬ気色なり。
(「初音」 p.146)

人も羨む六条院で何一つ不足なしに住んでおり、悩みごとなんてないように見える姫君が正月から離ればなれになって暮している母の手紙を見て泣くという話は、示唆することが大きい。作者はこの話を「初音」巻の紫の上の話のすぐ後に書いており、源氏に最も寵愛され、末長い契りを結んだ紫の上の幸せな記述と対照させている。六条院で最も華やかな春の御殿の幸福と悲しみの対照である。

まだ幼い明石の姫君が同じ六条院に住んでいるのに、実母とは離れて暮さなければならぬのはまさに悲劇と言えるもので、当時はそのようなことがよくあったとしても、やはり耐えがたいことである。しかも、それが最も華やかな時の元日に、最も華やかな御殿で行われているのは、その明暗をはっきり対照させてよりその悲しみを強くアピールするための作者の意図が感じられるところである。

また、次に訪れた夏の御殿には花散里が住んでいた。花散里は奥さんというより、変わらずそばにいてくれる友だちか妹という感じの付き合いで、「今はあながちに近やかなる御ありさまもてなしきこえたまはざりけり。」とあるように、源氏は彼女と夫婦として同衾することをしなくなったのである。

これは、一方では源氏との仲睦ましい関係を考えたらそれでいいことも知れないが、一方女としての生きる人生としては悲しいことである。もはや女としては認めてもらえないぐらい、外見も源氏の気持ちも変わっているのである。本文にも

縹はげににほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり。やさしき方にあらねど、葡萄鬘してぞつくろひたまふべき、我ならざらん人は見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ、(「初音」p.147)

とあり、源氏が贈った縹色の衣装も彼女にはあまり似合わず、髪の毛も大変年取って見えるので、源氏は他の男だったら連れ添う気も失ってしまうだろうと言う。少し手入れでもしないと一言いながら、そのような女にも変わらない自分の気持ちを自慢げに話す。確かに一夫多妻制でいくらでも女が選べる身分の人なら、女の人の外見が衰えることによって気持ちが他に走って永遠に振り向きもしなくなることも茶飯事だったのである。それを考えると、源氏が自分と関わりのあった女君を最後まで面倒を見るのは、誠実なこととも言えよう。

しかし、「心軽き人の列にて、我に背きたまひなましかば」と源氏も自ら指摘されているように、それは花散里の気持ちが重々しくて変わらなかったことにも原因があるのである。玉上琢弥氏はこのように述べておられる。

須磨・明石の流転の時、多くの女は源氏から去った。去らないのは幸福になる。末摘花のごとく、花散里のごとく。捨てない男は珍しく、去らない女は珍しいのである。17)

源氏が須磨にいる時、実際多くの女たちが彼を去ったのは事実である。花散里を源氏が捨てなかつただけじゃなく、花散里も源氏を離れなかつたので、今のような関係が続けられるのである。

しかし、この関係はもはや女と男の関係ではない。正月に源氏に会うのに、髪の毛の手入れもしないまゐるのは、もはや自分を源氏が女として見てくれることへの期待がすっかりなくなったことを意味する。前述したように、六条院で源氏の女君として一つの御殿に住んでいるながら、源氏とは夫婦として同衾することさえなくなっている。源氏は彼女の外見にその原因があるように話しているが、それは実際源氏の行動によっていくらでも変われることでもある。

女であり、源氏の女君の一人であるが、女として扱われないのは非常に気の毒なことである。彼女の諦めと我慢があつてこそ、源氏との仲睦ましい関係が続けるのである。このような彼女を代弁するのは、まさに自分が住んでいる夏の御殿の様子である。

17) 玉上琢弥(1965)『源氏物語評釈 第五巻』角川書店 p.169

夏の御住まひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好ましきこともなく、あてやかに住みなしたまへるけはひ見えわたる。(「初音」 p.146)

このように、春の御殿に比べて夏の御殿のひっそりして節制のある感じは、花散里という女君のすべてをそのまま反映していながら、また六条院の中で占めている彼女の位置、源氏の気持ちなどもともに代弁するようなものである。作者は住まいと着ている衣装などを通じて、女君をもう一度そこから投影させ、物語の中で多角度で凝視することができるようにしているのである。また、贈った正月用のきれいな衣装が似合わないことと、髪の毛を含めて外見の衰えなどを象徴的に描きながら、その裏側に見られる女としての悲しい人生もしっかりつかむようにしているのである。

次に言及されているのは、明石の君の住んでいる冬の御殿のことである。源氏は他の女君を訪問して、夕方には明石の君の所に来たのである。この冬の御殿でも花散里の場合と同じように、作者は住まいと着ている衣装などに明石の君を投影させている。

近き渡殿の戸押し開くるより、街簾の内の追風なまめかしく吹き匂はかして、物よりことに気高く思さる。正身は見えず。いづら、と見まはしたまふに、硯のあたりにぎははしく、草子どもとり散らしたるを取りつつ見たまふ。唐の綺のことごとし縁さしたる褥にをかしげなる琴うちおき、わざとめきよある火桶に、侍従をくゆらかして物ごとにしめたるに、エ被香の香の紛へると艶なり。手習どもの乱れうちとけたるも、筋変り、ゆゑある書きざまなり。(「初音」 p.146)

本文からもよくうかがえるように、優雅な香り、風趣ある琴、火桶に侍従香などを演出の道具として使っており、非常に趣味のいい気品のある住まいが明石の君を連想させてくれる。このような記述は、ひっそりした夏の御殿の雰囲気とは対照的だし、華やかな春の御殿の描写とも違う。作者は住まいの描写までも抜け目なく徹底的に女君たちのキャラクターに合わせているのである。夕方になってやってくる源氏を意識して特別念入りに用意したものであろうが、前述した花散里の場合とはかなり違う雰囲気の記述である。

前述した玉上琢弥氏も、さらに森本元子氏も花散里に対して「実生活の上で紫上に準ずる待遇をうけるこの女性の分があきらかにされている」¹⁸⁾と指摘されていることであるが、実際レベル的には花散里が上なのは確かである。しかし、源氏の女としての扱いは、明石の君の方が断然上である。源氏はこのような優雅な住まいに心を惑わせ、さらに

筆さし濡らして、書きすさみたまふほどに、みざり出でて、さすがにみづからのもてなしはかし

18) 森本元子(1991)「花散里」(『源氏物語講座2 物語を織りなす人々』 勉誠社 p.146

こまりおきて、めやすき用意なるを、なほ人よりはことなりと思す。白きに、けぎやかなる髪のかかりのすこしはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしき添ひてなつかしければ、新しき年の御騒がれもやとつしましけれど、こなたにとまりたまひぬ。（「初音」p.150）

とあり、実際会ってみたら明石の君が遠慮がちにふるまいながら、ほどよく親しく源氏に接すること、優雅で清楚な彼女の雰囲気にかかれてしまう。源氏は彼女から女を感じ、他の女とも違うと思う。それで、紫の上に嫉妬されてその機嫌を大変そこなうことを覚悟の上で、元日から明石の君の所に泊まることになるのである。

一年の始まりで、最も重要な意味を持つ正月に最も寵愛する女君のところに泊まらないというのは、紫の上としては大変悔しく、プライドの傷付くことである。しかも、相手は衣配りの時から女君の中でも一番嫉妬心をかきたてた明石の君である。源氏の彼女への特別な愛情と上品で優雅な彼女を想像して、紫の上は誰によりも嫉妬してしまったのであるが、事態は正月に源氏の外泊ということにまでいった。まさに嫉妬心に火をつけたようなものである。

めでたく楽しいことばかり続くはずの正月に、いきなり嵐前の複雑な感情がからみあう。衣配りの時から兆しを見せた嵐がいよいよ始まったのである。しかし、源氏は自分が大変なことをしたと思い、夜明けになる前にそこを離れた。

まだ曙のほどに渡りたまひぬ。かくしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、なごりもただならずあはれに思ふ。待ちとりたまへる、はた、なまけやけしと思すべかめる心の中はばかられたまひて、「あやしきうたた寝をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしもおどろかしたまはで」と御気色とりたまふもをかしく見。ことなる御答へもなければ、わづらはしくて、空寝をしつつ、日高く大殿籠り起きたり。（「初音」p.151）

本文を見ると、明石の君はまだ夜なのに、紫の上の機嫌のことを考えて離れていく源氏が恨めしくて悲しく思っていることがわかる。紫の上は紫の上で、一晩中苛立っていたはずである。源氏は紫の上についてうたた寝をして眠り込んでしまったと言いつつ、それぐらい見通しの紫の上は返事もしない。源氏は寝たふりをして、それ以上彼女にふれないでいる。この次には臨時客たちが年賀の挨拶に来て、盛大な宴会が開かれる場面が述べられている。

このように、作者は「初音」巻で六条院の最も華やかな正月の様相を描くことにおいて、明るい部分を描いたら、その次にその裏側にある暗い面を、またその次は明るい話を重ねていくことを繰り返している。このような構造の問題に気づいておられるのは原田敦子氏である。

初音巻は、主として年中行事の部分に光の世界、源氏の庇護下にある女性達の生活と

いう私的側面に影の世界を描き、二日の臨時客の記事を回転軸に、明暗をシンメトリカルに配置する構造をとっていると言することができる。即ち、巻頭の元日の歯固めと餅鏡に対する巻末の男踏歌が明の部分、正月行事のハイライトたる臨時客の行事を中にはさんで、前に描かれる六条院の女性達の受苦と、後に描かれる二条院の女性達が住む世界が暗の部分である。¹⁹⁾

原田氏は六条院世界の明暗をこのように正月における六条院の様子と二条院の女性たちの様子に大きく二つに分けておられる。しかし、私はこの巻で明暗に対する部分はずっと細かく緻密に構想されていることに気づくべきだと思う。

今まで見てきたように、「初音」巻のはじめから明るい話の後は必ずそれに対照される暗い話が伴われた。そして、それが何度も何度も繰り返されているのである。作者は光と影が、世の常であることを非常によく見抜いていると見える。いくら華やかに見えてもそれだけではないということ、暗い面が必ず共存することをよく知っているのである。

そのようなことがわかっても、それをまた物語の中でうまく描き出すのは難しいことであるが、作者は華やかな六条院を描くことにおいて、明るい部分だけの話で終わらずに影を物語の中にうまく構想して取り込ませている。そのため、明るい部分とその影がいっしょになって読者の頭の中で絵が完成され、一つの完璧な絵になって心に残るようになる。もしめでたく明るい話だけで終わったら、このように奥深い感じはしなかったのであろう。光と影の部分をいっしょに描き出すことによって、大変奥深く、物語的にもより緻密な構想を感じさせ、興味津々なものになっているのである。

4. 結

「玉鬘」巻と「初音」巻は『源氏物語』の中でも源氏とその一族の華やかな生活を最もよく見せてくれる巻である。特に六条院での華やかな話が中心をなしており、「玉鬘」巻の末から「初音」巻にかけては、六条院と二条院に住んでいる源氏の女君たちに関連する話が詳しく述べられている。この二つの巻は、源氏の女君たちが正月前後の行事などを通じて全部言及および登場しているし、彼女たちの六条院での地位や彼女たちの評価、外見、人柄などあらゆる面について非常に緻密に述べられている巻なので、女君の研究には欠かせない巻とも言える。

「玉鬘」巻で注目すべきことは、衣配りのことである。私は衣配りに関する記述は、色鮮

19) 原田敦子(1998)「栄華 その光と陰：源氏物語初音・胡蝶巻と紫式部日記」(『国文学攷 118』) 広島大学国語国文学会 p.18

やかな王朝衣装を通じてそれを読む人の想像力をかきたて、読む側がそれを着る女君のイメージを具体的なものにするという、非常に巧妙な手法を使っていると思う。さらに、紫の上が女君それぞれに贈る衣装を見ながら、嫉妬したり心穏やかではなかったりする様子を細かく描写することによって、この物語を読む読者の目を様々な角度で代弁するように描いていくのも、すばらしい小説展開法であろう。

作者は女君について直接言葉で述べる方法を使わず、その女君を直接見たことのない紫の上が源氏の選ぶ衣装の色や絵柄などで女君たちの性格や人柄などを投影して想像し、判断したのと同じように読者も女君たちについての想像と判断を衣配りと手紙の返事を通してするようにまかせている。それは直接記述で表現するより、もっと様々な形の想像をかきたてる効果があり、優雅な衣装に投影された女君は大変奥深く感じられる。

衣装だけでなく、作者は住まいの描写までも抜け目なく徹底的に女君たちのキャラクターに合わせている。作者は住まいと着ている衣装などを通じて、女君をもう一度そこから投影させ、物語の中で多角度で凝視することができるようにしているのである。また、贈った正月用のきれいな衣装が似合わないことと、髪の毛など外見の衰えなどを象徴的に描きながら、その裏側に見られる女としての悲しい人生もしっかりつかむようにしているのである。

「初音」巻では源氏が新しく造成した六条院ではじめて迎える正月の話が述べられている。正月を迎えた六条院はこの世の極楽を思わせる華やかさの極致を見せているが、多く指摘されているように、実際にはその華やかさの裏側にある暗い面もいっしょに照らし出しているのである。

私は特にこの「初音」巻の構造に注目をすべきだと思う。実際「初音」巻の構造を見ると、作者は六条院の最も華やかな正月の様相を描くことにおいて、明るい部分を描いたら、その次にその裏側にある暗い面を、またその次は明るい話を重ねていくことを繰り返している。作者は光と影が、世の常であることを非常によく見抜いていると見える。

作者は華やかな六条院を描くことにおいて、明るい部分だけの話で終わらずに影を物語の中にうまく構想して取り込ませている。そのため、明るい部分とその影がいっしょになって読者の頭の中で絵が完成され、より奥深く、より緻密な構造の物語に仕上げられているのである。

【参考文献】

- 2000 『日本風俗史事典』 弘文堂 p.201
- 1997 新編日本古典文学全集 『源氏物語1-6』 小学館
- 森一郎編著(1993) 『源氏物語作中人物論集』 勉誠社 p.134
- 日本文学研究資料刊行会・編(1982) 『源氏物語Ⅳ』 有精堂 p.265
- 吉本隆明(1982) 『源氏物語論』 大和書房 p.137
- 角川春樹(1983) 『平安朝の生活と文学』 角川書店 p.92
- 市古貞次編(1980) 『日本古典文学研究必携』(「別冊国文学特大号」) 学灯社 p.83
- 鈴木日出男(1989) 『源氏物語歳時記』(ちくまライブラリー30) 筑摩書房 p.100
- 山中裕(1972) 『平安朝の年中行事』 塙書房 p.21
- 玉上琢弥(1965) 『源氏物語評釈 第五卷』 角川書店 p.145
- 梅野きみ子(2007) 「「千年の春」を祝う六条院--『源氏物語』初音巻に見る男踏歌より」(『椋山女学園大学研究論集』) 椋山女学園大学 p.56
- 2006 「初音 王朝の雅 源氏物語の世界」(『別冊太陽 日本のこころ 140』) 平凡社 p.109
- 片根満保(1999) 「六条院の女君達--初音巻・胡蝶巻を中心に」(『国語と国文学』) 至文堂 p.34
- 原田敦子(1998) 「栄華 その光と陰 : 源氏物語初音・胡蝶巻と紫式部日記」(『国文学攷 118』) 広島大学国語国文学会 p.16
- 吉川和雅子(1998) 「源氏物語の衣装色彩 玉鬘の色」(『瞿麦』) 日本女子大学 p.14
- 田中幹子(1995) 「「源氏物語」初音の巻の明石の君について--「谷のふる巢をとへる鶯」歌の解釈を中心に」(『和歌文学研究』) 和歌文学会 p.15
- 長谷川政春(1991) 「末摘花--「唐衣」の女君--」(『源氏物語講座2 物語を織りなす人々』) 勉誠社 p.113
- 森本元子(1991) 「花散里」(『源氏物語講座2 物語を織りなす人々』) 勉誠社 p.146
- 池浩三(1991) 「光源氏の六条院--そのかくされた構想」(『中古文学』) 中古文学会 p.40
- 渡邊道子(1991) 「六条院春の町における植物 : 紫上との関わりを中心に」(『実践国文学』) 実践女子大学 p.71
- 安随直子(1991) 「初音巻の基底--六条院の内と外」(『国語国文』) 中央図書出版社 p.10
- 河添房江(1988) 「六条院王権の聖性の維持をめぐる--玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」」(『国語と国文学』) 至文堂 p.30
- 増田繁夫(1987) 「春秋の争い--玉鬘・初音・胡蝶」(『国文学 解釈と教材の研究』源氏物語の巻々--作品論の現在<特集>) 学灯社 p.76
- 土方洋一(1983) 「六条院の光と影--テキスト論の視座から」(『国語と国文学』) 至文堂 p.40

要 旨

「玉鬘」巻と「初音」巻は『源氏物語』の中でも源氏とその一族の華やかな生活を最もよく見せてくれる巻である。特に六条院での華やかな話を中心をなしており、「玉鬘」巻の末から「初音」巻にかけては、六条院と二条院に住んでいる源氏の女君たちに関連する話が詳しく述べられている。

「玉鬘」巻で注目すべきことは、衣配りのことである。衣配りに関する記述は、色鮮やかな王朝衣装を通じてそれを読む人の想像力をかきたて、読む側がそれを着る女君のイメージを具体的なものにするという、非常に巧妙な手法を使っている。作者は女君について直接言葉で述べる方法を使わず、その女君を直接見たことのない紫の上が源氏の選ぶ衣装の色や絵柄などで女君たちの性格や人柄などを投影して想像し、判断したのと同じように読者も女君たちについての想像と判断を衣配りと手紙の返事を通してするようにまかせている。それは直接記述で表現するより、もっと様々な形の想像をかきたてる効果があり、優雅な衣装に投影された女君は大変奥深く感じられる。

「初音」巻では源氏が新しく造成した六条院ではじめて迎える正月の話が述べられている。正月を迎えた六条院はこの世の極楽を思わせる華やかさの極致を見せているが、多く指摘されているように、実際にはその華やかさの裏側にある暗い面もいっしょに照らし出しているのである。

特にこの「初音」巻の構造には注目をすべきであろう。実際「初音」巻の構造を見ると、作者は六条院の最も華やかな正月の様相を描くことにおいて、明るい部分を描いたら、その次にその裏側にある暗い面を、またその次は明るい話を重ねていくことを繰り返している。「初音」巻のはじめから明るい話の後には必ずそれに対照される暗い話が伴われた。そして、そのようなことが非常に緻密に何度も繰り返されている構造となっているのである。

作者は光と影が、世の常であることを非常によく知っており、華やかな六条院を描くことにおいて、明るい部分だけの話で終わらずに影を物語の中うまく構想して取り込ませている。そのため、明るい部分とその影がいっしょになって読者の頭の中で絵が完成され、より奥深く、より緻密な構造の物語にできあがることができたのである。

キーワード：源氏物語、「玉鬘」巻、「初音」巻、衣配り、正月、年中行事

투 고 : 2010. 2. 28
1차 심사 : 2010. 3. 13
2차 심사 : 2010. 3. 27